

# 第3章

## 自閉症・情緒障害特別支援学級での指導・支援

### ～力をつけて，通常の学級，学年等につなげる～

自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍する子どもたちにとって，安心した生活の中で学び，力をつけることで自信を深め，かかわる集団の規模が広がっていくことは，将来の自立と社会参加に向けた重要な取り組みの一つといえます。

そのために，まずは自閉症・情緒障害特別支援学級での学習や生活を丁寧に行います。その子どもの思いに寄り添って作成した「個別の指導計画」を活用し，PDCA（計画→実践→評価→改善→）サイクルの手法で，計画的・継続的な支援を行きましょう。

また，「交流及び共同学習」等を設定し，かかわる集団の規模を広げる中で，特別支援学級でつけた力が日常生活に広がるようにしていきます。このとき，交流及び共同学習のねらいが明確なこと，そして，子どもが必要感をもっていることが大切となります。

この章では，自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍する子どもが，特別支援学級で障害による困難さの改善，克服につながる力を向上させ，交流及び共同学習等により通常の学級とのかかわりを深めたり，学年や全校の活動に参加したりする事例を紹介します。

## 事例 28

# 情緒面の安定を図り、大きな集団での学習につなげて

～担任間の連携で、原学級での学習時間を増やした事例～

4年生のサトシさんは、低学年の頃から多動性・衝動性が強く、対人関係のトラブルがありました。自・情障学級での学習を重ね、落ち着いて学習できる時間が増えてきました。そこで、次のステップとして、大きな集団の中で学習する力を伸ばしたいと考え、原学級担任と連携しながら落ち着いて学習できる環境を整え、本人と相談して段階的に原学級で学習する時間を増やしていった事例を紹介します。

### ◇ 低学年の姿から

サトシさんは元気で運動能力も高いのですが、動きが激しく、友だちに対する攻撃的な言動が多かったため、注意される場面が多くなっていました。周囲の保護者からも、乱暴な子とみられ、母親も孤立ぎみでした。また、勉強はやっても分からないと感じ、自分に向けられた一つ一つの言葉に過敏に反応するので、「授業の妨害をしている困った子」と見られがちでした。自・情障学級においても、学習課題に集中できる時間は限られており、些細なことで感情的になる場面がみられました。

### ◇ 自己肯定感を高めるために

自・情障学級のタナカ先生は、サトシさんには二次的な不適応状態が出ているのではないかととらえました。そこで、サトシさんの興味関心を大切にしたい学習活動をたくさん取り入れ、自分の得意なことに思い切り取り組み、その活動が評価され、自信をつけることを当面の教育課題に設定しました。

サトシさんは、身体全体を使った活動に興味を示し、工作など物を作る活動は大好きでした。のこぎりや金づちを上手に使うことができるので、タナカ先生は、サトシさんと一緒に花壇の柵や看板などを作りました。時には管理技術員さんも一緒に手伝ってもらいました。その働きを多くの先生方にほめてもらうことで、サトシさんは自信をつけていきました。サトシさんの表情は穏やかになり、少人数の集団の中では、落ち着いて課題に取り組む姿も見られるようになりました。

### ◇ 社会性を高めるために

サトシさんが、落ち着いて課題に取り組む時間が伸びてきたので、人との適切なかわり方を学ぶ場面を計画しました。制作活動に必要な材料を買う場面では、実際に校外に出かけ、店員さんへの依頼の仕方など、体験を通して学習しました。また、特別支援学級内の自分より年下の児童とかかわる活動も設けました。年下の児童に対しては、自分の要求を抑えて遠慮しながら伝える場面がみられるようになり、そうした心遣いができた場面を大いに認めていきました。

こうした学習を通してサトシさんにも変化がみられました。それまで「1組（サトシさんの原学級）なんか絶対に行かない」と言っていたのですが、休み時間や放課後、自ら原学級に行く姿がみられました。情緒の安定が図れ、自信もついてきたので、次のステップに進める段階にきていたのでしょう。タナカ先生は、個別の指導計画の中に、段階的に大きな集団の中で学習できるようにするための具体的な方向がなかったことに気付きました。すぐに、原学級の担任と相談し、どの場面でどんな支援があれば一緒に学習していくことが可能なか検討していきました。

#### ◇ 周囲の理解を高めるために

特別支援学級の教室には、休み時間になると多くの児童が訪ねてくる開放的な雰囲気があり、原学級の児童も、頻繁に教室に顔を出していました。そこで、タナカ先生がサトシさんの作品を紹介すると、子どもたちはサトシさんの新たな面に気づき、見直した様子がみられました。

サトシさんのよさをもっと知ってもらいたいと考えたタナカ先生は、原学級で2時間、特設の授業を行うことにしました。そこでは、障害の疑似体験を通して、人間にはさまざまな特性があり、誰もが苦手な面を持っていること、そしてそれは本人の努力ではどうしようもないこと、みんな違ってみんな素晴らしい面を持っていること等を伝え、支えあうために何が大切なのかを一緒に考えました。また、4年生の具体的な姿を通して、友だちとのかかわり方のよさを認めるようにするとともに、特別支援学級ではどんな学習をしているのか紹介していきました。加えて、保護者向けのお便りで発達障害の理解と対応の仕方について紹介し、学年PTAでも発達障害の理解につながる話をする機会を設けました。

#### ◇ 原学級での学習をすすめるために

原学級で学習していくステップとして、まずはサトシさんが得意な教科から一緒に学習していく時間を増やしていきたいと考え、体育・図工・総合の時間での学習場面を検討しました。タナカ先生は、原学級の教室にいられないと感じた時に黙って出てしまうのではなく、担任に言葉で伝えてほしいと考え、学習のルールを再確認する時間をとりました。その上で、原学級ではサトシさんの座席を担任の近くに配置し、同じグループに穏やかに自己主張することができるメンバーを加え、1時間の学習の見通しを必ず黒板に提示するようにしていきました。

さらに、本人が自信をつけてきた算数でも一緒に学習できるように、タナカ先生は、サトシさん用の学習カードを用意し、課題が終わってしまった後に具体的に何をすればいいのかを書いて示しておくなどの対応の仕方を担任の先生と相談していきました。

#### ◇ 担任間での連絡を大切に

こうしてサトシさんは、少しずつ大きな集団の中でも落ち着いて学習することができるようになってきました。しかし、慣れてくると、友だちとのかかわり方に新たな課題が出てきました。サトシさんは、相手の気持ちを考えずに、思ったことを言うてしまうため、友だちを傷つけてしまうのです。トラブルが起きてしまった時にはすぐに担任間で連絡を取り合い、サトシさんが落ち着いた時に、特別支援学級で「サトシさんの言葉で相手はどんな気持ちになってしまったのか、どんな伝え方がいいのか」を考える時間を設けました。また、原学級でも攻撃的ではない自己主張の仕方を学習する時間を設け、担任はサトシさんが学んだ方法で話すことができた時には、すぐその場で称賛するようにしました。どの場面でも同じように支援することで、大きなトラブルは減少し、落ち着いた生活ができる時間が増えつつあります。

#### 事例から学ぶ

自・情障学級において個別の指導計画を作成する段階では、情緒面の安定や社会性を伸ばしていく観点を大切にしていきます。しかし、忘れてしまいがちなのが、長期的な視点で、少しずつ大きな集団の中で学習できるような支援を検討することです。支援の継続性を保ち、より大きな集団でも落ち着いて学習活動に参加できるように支援するためにも、日頃から担任間でその子どもちょっとした変化を伝え合い、情報交換ができる関係をつくっておきましょう。

## 事例 29

# 全職員の共通理解による支援

～「可能性の芽」から「できる状況づくり」へ～

小学校入学当初から、全校集会や行事の際、歩き回ったり不適切な言葉を発したりするなど、行動が見られたコウジさん。1年生の3学期には、全校集会に「めんどくさいから行かない」と言って参加しないことも増えました。2年生になり個別の指導計画を更新する上で、可能性の芽をとらえ直し、教育課題を見直しました。そして、コウジさんにかかわる教師だけでなく全職員で共通理解を図り、みんなで教育課題を確認し支援を考え合いました。こうした取り組みによって、少しずつ変容していったコウジさんの姿を紹介します。

### 1 可能性の芽のとらえ直しと教育課題の見直し

2年生に進級した自・情障学級のコウジさん。個別の指導計画を更新するために、日常生活の姿をあらためて見返し、可能性の芽をとらえ直してみました。そして、教育課題を見直しました。  
(全校集会にかかわる部分を抜粋)

#### 日常生活の姿

- ・集団での活動が苦手な参加を渋ることがあるが、あらかじめ見通しがもてるように予告したり、仲のよい友だちに誘われたりすると参加できる。
- ・頑張ったり我慢できたりしたときに、スキンシップを交えたり、ごほうびシールなどを使ったりして称賛されると、うれしくて、もっと頑張ろうとする。
- ・興奮したときに、自分からその場を離れても、何とか落ち着こうとすることがある。



#### 可能性の芽

- ・見通しがもてたり、仲のよい友だちと一緒にだったりすると、体育や音楽、集会など集団での活動に参加することができそうである。
- ・頑張ったことに対する称賛やごほうびシールがあれば、めあてに向かってもっと頑張ろうとするだろう。



#### 教育課題

- 全校集会では原学級の列の横か後ろで、仲のよい友だちと集会の終わりまで参加することができるようになる。(第一回支援会議で修正したもの)
- 事前に本人と相談をして約束を決め、終わったときに教師と一緒に約束が守れたかどうか振り返ることができるようになる。

コウジさんにかかわる職員が集まって一回目の支援会議を開き、教育課題を検討しました。そして、コウジさんが同年代の大きな集団の中で、状況に合った行動に意識を向けられるようになってほしいという願いを共通理解しました。そこで、支援のしやすさも考え、「全校集会では原学級の列の横か後ろで、仲のよい友だちと集会の終わりまで参加することができるようになる」と教育課題を修正し、実現に難しさはあるけれども、その実現に向けて全職員で支援の方法を考えていくことにしました。

## 2 全職員による支援会議

コウジさんに対する支援を共通理解した上で、職員が全校集会での支援にかかわるために、学級担任、専科はもとより、学校生活にかかわる図書館司書、用務員が参加する支援会議を行いました。それは、体育館の中を歩き回ったり、大きな声を出したりするコウジさんに対してどうかかわったらいいのか、全職員の課題でもあったからです。

「全校集会では原学級の列の横か後ろで、仲のよい友だちと集会の終わりまで参加することができるようになる」という教育課題について、それぞれ自分だったらどんな支援を考えるか付箋紙に書き、発表しました。さっそく担任は、提案されたアイデアの幾つかを具体的な支援として「できる状況づくり」に生かしていました。



## 3 コウジさんへの支援の実際

「可能性の芽」や支援会議での提案をもとに、全校集会の前日や当日朝、時間や内容などを本人に伝えたり、参加の仕方を約束したりすることにしました。「マサシくんといっしょにいく」「りょうち（座る場所）の中にいる」「あばれない」「つばをはかない」など本人と相談しながら、毎回三つ約束を決め、カードに書いておきました。全校集会が終わるたびに教師と一緒に振り返り、約束が守れたらその場で称賛し、頑張った分だけシールをはって頑張りが目に見えて分かるようにしました。そして、自・情障学級のみんなが同様にシールを100枚貯めたら校外学習に行くというみんなのめあてを位置付けました。また、コウジさんの座る場所が分かるように、体育館の床にビニールテープをはって「りょうち」を作ったり、安心できるようにお気に入りの小物を持っていくことも認めたりしました。最後まで頑張って参加できたときには、多くの職員が「頑張ったね」「静かにできたね」と称賛の声掛けをしたり、一緒に喜んだりしました。

## 4 コウジさんの変容

初めは全校集会に参加することを嫌がったり、動き回ったりしたコウジさんですが、支援をしていく中で少しずつ変化が見られ始めました。いろいろな先生が声を掛けたり、手をつないで一緒に自分の場所に向かったりすると、自分の「りょうち」にすっと座るなど、動き回ることが減っていきました。そして、体育館に入ると自分から座る場所に入ることも増えてきました。大きな声を出してしまうことはまだ時々ありますが、以前に比べるとずいぶん我慢ができるようになっていきました。全校集会の後、担任と話をしながら「暴れなかったよ。だから○（まる）」「ちょっと騒いじゃったね。△（さんかく）かな」と振り返ることを繰り返す中で、動き回ったり、騒いだりすることは少しずつ減り、全校集会の終わりまで参加できるようになってきています。

### 事例から学ぶ

どう支援したらいいのか分からず、苦しい時があります。そんなとき、その子どものプラス面にもう一度目を向けてみましょう。それが「可能性の芽」のとらえ直しにつながり、そこから「できる状況づくり」を考えることができます。その際、一人で抱えこまず、支援会議を開くなどできるだけ多くの人からのアイデアを集めることはとても有効です。また、支援について全職員が共通理解することで、直接かかわる教師だけでなく、多くの職員が支援することができます。支援の困難さを感じる子どもには、全職員での共通理解の上に立った支援を進めていきましょう。

## 事例 30

# 個別の学習でつけた力を

## 原学級での学習に生かして

～担任間の連携を大切にし、原学級につないだ事例～

ヒロシさんは、小学校1・2年生の頃、ささいなことで教室から飛び出すことがありました。教育相談を重ねて自・情障学級に入級し、自分に合った方法でじっくり学習を続けることで、できることが少しずつ増えてきました。4年生になった今、原学級の友だちと一緒に学びたいという願いを持つようになり、原学級の担任と連携して、段階的に一緒に教科学習に取り組む時間を増やしていった実践を紹介します。

### ◇ 困っていたヒロシさん

4年生になったヒロシさんは、1年生の頃の自分を振り返ることができるようになりました。「先生の話聞いていられなくて、つまらなくなると教室を抜け出してふらふらしていたよ」「今も頑張ろうと思うんだけど、少しでも気になるところがあると、じっと止まっていられないんだ」普段はとても優しい面をもっているヒロシさんですが、時々パニックを起こして大声を出してしまうので、なかなか自分のよさを友だちに認めてもらえないことが悩みでした。

### ◇ 本人の得意な力を探りながら

特別支援学級のシミズ先生は、諸検査を実施してヒロシさんの特性を探るとともに、一対一でじっくりかかわる時間を大切にしました。初めは「むり」「やらない」といった言葉が多かったヒロシさんですが、自分の好きなこと・得意なことについて、たくさん話をするようになりました。特に大好きなキャラクターの話になると、細かなところまでとてもよく知っていることが分かりました。落ち着いて会話をする時間が増えると、「先生、マスクしているけれど大丈夫なの?」と、相手を気遣う言葉も出てくるようになり、シミズ先生はとてもうれしくなりました。

検査の結果からも、本人の得意な力が明らかになってきました。ヒロシさんは全体を捉えることが得意で、視覚的なヒントを基に類推していく力が得意なことも分かりました。また、ものごとを素早く処理していく力も得意であることが分かりました。

そこで、次の2点を大切に、個別の指導計画を作成していきました。

- ・達成可能な身近な目標を設定し、それをやり遂げる経験を大切にする
- ・パズルや視覚的なヒントを入れた教材を用いて、読み書きの基礎的な力をつける

### ◇ 指導の実際から

書くことが極端に苦手なヒロシさんは文字を書くことに強い抵抗がみられました。本人は書き順に従って一つ一つ覚えていく方法は苦手で、文字をパッと見て、形をとらえていく方法が得意でした。そこで、独自の方法ですでに覚えている筆順を修正することは避け、文字に絵を重ねてイメージ化して漢字を覚える方法に取り組みました。また、1時間に取り組む問題数を思い切って少なくし、漢字を幾つかのパーツに分けて覚えるプリントや漢字のパズルなど楽しめる教材を用意しました。併せて、眼球運動にも課題が指摘されたので、授業の後半には、パソコンを利用して楽しみながら視知覚をトレーニングする学習も取り入れていきました。

また、友だちと協力し、最後までやり遂げる経験をすることをねらって、知障学級と合同で社

会見学に出掛ける学習を計画しました。具体的で明確な目標があるので、これまで学習してきた力を生かして進んで学習に取り組み、課題への集中力や持続力が伸びていきました。

#### ◇ 本人が意欲を持てる評価方法で

シミズ先生は、ヒロシさんが苦手な国語や算数の問題に進んで取り組むための工夫を進めました。この時間に取り組むプリント2枚をやり遂げたら、大好きなキャラクターのシールが1枚貼ってもらえ、さらにシールが10枚たまったら大きなシールがもらえるようにして、ファイルにプリントをためていきました。これを励みに、学習にも進んで取り組むようになり、参観日には、得意そうにファイルを母親に見せる姿が見られました。

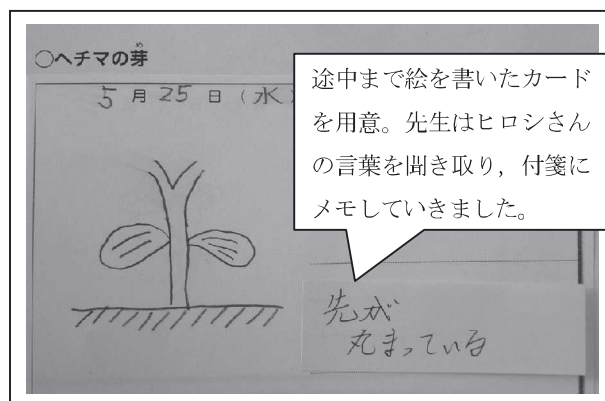
#### ◇ 少しずつ自分の学年を意識する環境に

それまで、特別支援学級の教室では、人間関係に配慮して異年齢のグループで活動する場面も多かったのですが、教科学習の場面では、学年の違いをはっきり意識する環境づくりをすすめました。教室の中に、学年ごとの学習スペースを作って、原学級の友だちが現在取り組んでいる学習活動に関する掲示を多くし、原学級に戻った時に行う活動を意識付けていきました。

#### ◇ 原学級との連携

ヒロシさんは、3年生の後半には、着席して学習に取り組むことができる時間が伸びてきました。そして、「4年生になったら理科に行ってみたい」という願いをもちました。観察や実験が大好きで興味をもっていたのですが、シミズ先生は不安でした。好きなことは自分でどんどん勝手に進めてしまい、準備やまとめの話を聞いていられない姿が容易に想像できたからです。そこで、原学級の担任と相談しながら、本人に合った支援の方法を検討していきました。

まず始めの数時間は、特別支援学級担任が付き添って理科の授業を受けました。授業の後に担任間で相談して、どのように課題を提示し、どのように声を掛けると落ち着いて参加できるか確認しました。また、特に待っていることが難しいと思われる場面に対応するために、休み時間や放課後を利用して、実験に使う道具などをあらかじめ見せておくようにしました。更に、ノートに書き込むことが難しい場面では、特別支援学級で取り組んでいる穴埋め式の学習カードを用意して書き込むか、特別支援学級に戻ってから学習してもいいことを確認していきました。理科で学習したことも、いつもの学習ファイルに書き込み、大きなシールを貼ってもらうことで、はりきって理科の授業に参加するようになりました。心配された「待つ場面」も、周囲の児童が上手に声を掛けてくれる場面が多く、自信をもって学習に参加しています。



#### 事例から学ぶ

この事例のように、衝動的な言動がみられる子どもの場合には、情緒的に不安定な時期に無理に原学級で学習する時間を設けるのではなく、小集団の中で自分に合った学び方でじっくり学習に取り組み、自信をつけたところで段階的に通常の学級に戻る時間を増やしていく方が効果的な場合もあります。本人の状況を多面的にとらえ、関係者で十分に共通理解し、段階を見極めて少しずつ大きな集団での学習につなげていきましょう。

交流及び共同学習の場面では、ただ原学級で学習する時間数だけを設定してしまいがちですが、予想される困難点に対し、特別支援学級担任と原学級の担任が連携し、あらかじめ支援方法を打ち合わせておくことでスムーズに学習に取り組み、力をつけることができるように思います。